



Artists Interview
Classic

Tedi Papavrami テディ・パバヴラミ

アルバニア生まれのヴァイオリニスト 波乱万丈の半生を綴った自叙伝の邦訳が刊行

取材・文／伊熊よし子 Interview & Text by Ikuma Yoshiko

共産主義独裁政権下のアルバニアからパリに移り、ひたむきにヴァイオリニストとしての道を切り拓いてきたテディ・パバヴラミ。現在は音楽家としての活動のみならず、作家、俳優、翻訳家としても活躍し、ジュネーヴ高等音楽院では教鞭も執り、多くの弟子を輩出している。そんなパバヴラミの文才に着目したフランスの出版社から自叙伝が刊行され、3月には日本語訳『ひとりヴァイオリンをめぐるフーガ』が出版された（藤原書店）。これを機に来日してコンサートも行ない、インタビューでは音楽と人生について雄弁に語った。

自分の音楽を作ること

今回の来日は、自伝の出版記念会がメインに据えられていたが、4月7日にはパバヴラ

ミ&萩原麻未の特別チャリティリサイタルがHakuju Hallで開かれ、J.S.バッハの「シャコンヌ」、ラヴェルの「ツィガヌ」、サラサーテの「ツィゴイネルワイゼン」、ドビュッシーとフォーレのソナタなどを滋味あふれる響きでじっくりと聴かせた。

パバヴラミは、このバッハの演奏を非常に大切に考えている。自伝原著と同時発売された『ヴァイオリニストひとり、世界は無限大』と題されたCDには、バッハ、パガニーニ、イザイ、バルトークの無伴奏作品が収録され、スカルラッチのソナタを無伴奏ヴァイオリンで演奏する編曲版（パバヴラミ編）も含まれている。

「本にも書きましたが、私は8歳でヤッシャ・ハイフェッツの録音を聴き、大きな衝撃を受けました。当時はまだハイフェッツのすざ

まじいまでの超絶技巧に耳が奪われていましたが、12～13歳ころになると、その繊細な表現力に魅せられるようになりました。以来、ハイフェッツのとりことなり、現在でも尊敬の対象です。当初から彼のボウイングを聴き取り、それを見習っていたのですが、のちにヴィクトリア・ムローヴァから弓の使い方が正しくないと指摘され、バッハを弾くために10年間かけてボウイングを変えました。」

パバヴラミは、それまでサラサーテなどの輝かしい作品を弾くのに向いたボウイングを行っていたのだが、ムローヴァはバッハに適したボウイングを伝授してくれた。

「私は11歳でフランスに移住しました。子ども時代の音楽とのかかわり、アルバニアでの人生などは本に詳しく書きましたが、これまでけっして楽な人生ではありませんでした。パリ

ではハイフェッツの弟子にあたるピエール・アモイヤルに師事することができ、ここでもハイフェッツとのつながりを強く感じました。ただし、あまりにもハイフェッツにあこがれを強く抱き、その演奏を聴きすぎると、たんなるコピーをするようになってしまいます。私はそれを乗り越え、アモイヤル先生から多くを学び、自分の音楽を作るよう努力しました」

CDのスカララッチィは、まさにパバヴラミの音楽。鍵盤楽器用の原曲の良さを崩すことなく、弦に置き換えている。

「スカララッチィはシンプルな作品ゆえ、編曲はそれほど難しくはありませんでした。むしろ演奏のほうが難しいですね」

感情表現の一端として

パバヴラミは1971年、アルバニアのティラナに生まれた。ヴァイオリン教師だった父親から手ほどきを受け、5歳からヴァイオリンを始める。11歳で演奏したソーレのカデンツァによるパガニーニのヴァイオリン協奏曲第1番は、聴衆に衝撃をもって迎えられ、「アルバニアのモーツァルト」と称賛されるようになる。

11歳でフランスに移住し、15歳で両親とともに亡命を余儀なくされ、祖国に残された家族の心配、ヴァイオリニストとしての将来への不安にさらされるなど、重く暗い時代を経験している。しかし、85年ロドルフォ・リビツァー賞国際コンクール、93年パブロ・サラ

サテ国際コンクールの両方で優勝の栄冠に輝く。以後、ソリストとして著名な指揮者やオーケストラ、ピアニストと共演を重ね、録音にも意欲的に取り組む。

「18歳のころからずっと録音はプロデューサーのジャン＝マルシャル・ゴラスと組んでいます。彼は繊細で鋭敏な耳の持ち主で、音を作る本当のプロです。私は当初、ハイフェッツの影響が大きかったため、メタリックでダイレクトな音で弾いていました。それを彼がもっと広がりをもった柔軟性に富む音を出したほうがいい、と指摘してくれたのです。私には聴こえない音が、彼の耳には聴こえる。まさに録音を行なうたびに私は自分の音楽が大きく変容していくのを感じました。ムロヴァと同じく、こうした適切な助言が私の音楽を根本から変え、より良い方向へと導いてくれたのです。録音はとても大切ですので、ジャン＝マルシャルはいわば同志のような存在ですね」

本には、波乱の前半生が描かれ、故郷、家族、初恋、読書、練習、友情など、さまざまな側面が描き出されている。彼は子どものころから大の読書家で、物を書くことにも興味を示し、14歳からフランス語で書き始めた。2000年からは、アルバニア最高の文学者イスマイル・カダレの作品のフランス語への翻訳も任せられ、すでに10冊が世に送り出されている。

「今回の本は、自分の記憶と感情を呼び覚ます作業でしたが、書き進めるうちに次第に記憶が鮮明に蘇ってきました。私は翻訳も行なっていますが、翻訳と演奏は酷似していると感じています。どちらも原作があり、それを伝えていく役割を担うからです」

現在は多岐にわたる活動を行っているパバヴラミ。今後の録音はジュネーヴで近所に住むという親しいピアニスト、ネルソン・ゲルナーとのフォーレとフランクのソナタを予定している。さらに6月にはマルタ・アルゲリッチが行っているルガーノ音楽祭に再度招かれ、共演を果たすことになっている。

「アルゲリッチは、すばらしい人格と音楽性の持ち主です。以前、一度共演する機会があったのですが、本当に夢のような経験でした」

パバヴラミは話すときに幾重に

も表情が変化していく。それはまさに俳優のようで、ジャンヌ・モローに見出されて『危険な関係(TV版)』の主演男優に抜擢され、カトリヌ・ドヌーヴやナスターシャ・キンスキーと共演したことにも表われている。なお、彼は同ドラマの音楽制作も担当している。

「演奏すること、演じること、翻訳すること、編曲することなど、さまざまな作業は自分の感情表現の一環です。書くことはかなり自由ですが、音楽のほうが厳密な形式が決まっていますので、演奏はそれに従う必要があります。私はステージで演奏するのは人生のたった1%だと思っています。そこに至るプロセス、膨大な練習時間は舞台の上での時間の何千倍も要するからです。これまで過酷な人生を歩み、あまり楽しむことを優先してきました。今後は、人生を少し楽しみたいと思います。もちろん、演奏を聴いてもらうのは大きな喜びであり楽しみですが、それを完璧にこなすためには万全の準備をしないとね」

ふたたび、複雑な表情が顔をのぞかせた。

Profile

1971年アルバニア・ティラナ生まれのヴァイオリニスト。フランス政府から奨学金を受け、82年に渡仏。85年ロドルフォ・リビツァー賞国際コンクール優勝、93年パブロ・サラサテ国際コンクール優勝および特別賞受賞。2008年よりジュネーヴ高等音楽院教授を務める。2014年、フランス政府より「芸術文化勲章シュヴァリエ」受章。使用楽器はLVMH モエ ヘネシー・ルイヴィトン 貸与の1727年製ストラディヴァリウス“Reynier”。2013年、半生を綴った自叙伝の原著およびCD『ヴァイオリニストひとり、世界は無限大』を同時発売。2016年3月、本書の邦訳『ひとりヴァイオリンをめぐるフーガ』が刊行された。



ひとり
ヴァイオリンを
めぐるフーガ
(藤原書店)



ヴァイオリニスト
ひとり、
世界は無限大
(マーキュリー・ZZT320)

New Album



バルトーク:
ヴァイオリン
協奏曲第2番、
管弦楽のための
協奏曲
(マーキュリー・Alpha205)



BOOK REVIEW

リュック・フェラーリ
センチメンタル・テールズ
あるいは自伝としての芸術
リュック・フェラーリ=著
椎名亮輔=訳
¥2,700 アルテスパブリッシング



煙幕の音楽家

ミュージック・コンクレートや電子音楽の諸作で知られるリュック・フェラーリが遺した「自伝」とラジオ・ドラマ「センチメンタル・テールズ」を中心に、訳者による小伝などをあわせて収める。「自伝」としても鵜呑みにしてはいけない。ある頁では1934年リヨン生まれと言いつつ、別の頁では1930年マルセイユ生まれと言うが、じつは1929年パリ生まれ。もっともみづから文中で「嘘の日付を書いていた」と述べて

いる。一方のラジオ・ドラマも多分に「自伝」的な内容だ。ここではテキストのみが掲載されているが、実際に放送された際にはさまざまな音／音楽もあり、テキストは作品の一部と考えるのが妥当だろう。訳者による解説、フランスのレーベル「shiin」から発売されたCDとあわせて楽しみたい。目を凝らすように読み進めると煙幕の向こう側に音楽家の本当の姿が見え隠れする、ような気がする。

ひとりヴァイオリンを
めぐるフーガ
テディ・ババヴラミ=著
山内由紀子=訳
¥4,600 藤原書店



波乱万丈の半生

1971年、共産主義独裁政権下のアルバニアに生まれ、11歳でフランスへ移住、15歳で亡命したヴァイオリニストの前半生を描いた自叙伝の邦訳。実際の出来事ばかりでなく筆者の気持ちも驚異的な記憶力で綴られており、伝記というよりも、さながら冒険譚のようにおもしろい。各章末にはQRコードが付され、本書原著と同時発売されたCDからの抜粋も楽しめる。

洋楽ロック&ポップス・
アルバム名鑑vol.2
1971-1977
湯浅 学=監修
¥2,400 ミュージック・マガジン



脳内音楽史を更新

2015年10月に発売された第1弾に続く2冊目。チャート・アクションを軸に紹介する盤を選んでいることもあり、日本でも知名度はあるものの評価の曖昧なジョン・デンヴァーやシカゴの爆発的なヒット、マニアックな印象のあるフランク・ザッパのヒット・チャートでの健闘など、こちらの勝手な先入観をひっくり返す発見が多い。頁を繰るたびに頭の中の音楽史が少しずつ更新される快感がある。